様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 16 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（ C ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２００１８
研究課題名（和文）ディアレクティケーとレートリケーの現代的意義の研究-哲学史的視座から
研究課題名（英文） A Study on the Significance of Dialectic and Rhetoric - From a philosophical and historical point of view
研究代表者
赤井 清晃（AKAI KIYOAKI）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：００２９４４９７

研究成果の概要（和文）：
この研究は，アリストテレス主義に起源をもつ，ディアレクティケー（問答法）やレートリケー（弁論術）が，哲学の歴史において，いかに重要な役割を演じ得るのかを，ホワイトヘッドの著作を一例として吟味した．これによって，意識的にせよ，無意識的にせよ，彼の用語は，一種のディアレクティケー的方法あるいはレートリケー的な仕方で，先行する哲学者たちの主要な概念を説明し，批判していることが明らかにされた．そして，これらの現代的な意義もここに存する．

研究成果の概要（英文）：
This study examined how dialectical or rhetorical method which has its origin in Aristotelianism can play a vital part in a history of philosophy which are described in Whiteheadean writings. By means of this examination, it is elucidated that Whiteheadean terms are, consciously or unconsciously, used to explain or to critise his preceding philosphers' key concepts in a kind of dialectical method or a rhetorical manner and here lies a modern significance of these.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：ディアレクティケー，レートリケー，アリストテレス主義，ホワイトヘッド

１．研究開始当初の背景

(1)従来の研究においては，プラトンやアリストテレスなどの個々の哲学者における「ディアレクティケー」の概念についての研究は散見されるし，また，近現代における「弁証法」についての個別的な研究は存在する．また，これとは独立して，「レートリケー」のみを論及する研究は見受けられる．だが，これらの間をつなぐ，西洋中世における「ディアレクティカ」(dialectica)まで視野に入れた研究は稀である．すでに，西洋中世哲学における「ディアレクティカ」が「ロジカ」(logica)と同一視される傾向があり，原初的な「ディアレクティケー」の概念の曖昧化あるいは拡張が行なわれている．この点で，とりわけ，西洋古代哲学から西洋中世哲学への移り変

わりに関しては，イタリアの A.Zadro や C.Giacon などの研究を別にすると，特に，英米語圏の研究においては，未だ十分解明されているとは言いがたく，従って，英米語圏の研究の影響が大きく，イタリア語圏の研究成果を十分咀嚼しているとは言えない我が国においても，同様の状況である．

(2)近現代哲学においては，通常，「弁証法」と訳され，哲学史的に見て，より原初的には，「問答法」と訳し分けられる「ディアレクティケー」(dialektike, dialectica, dialectique, Dialektik, dialettica)の概念および「修辞学」「弁論術」，ときに，「動心法」とも訳される「レートリケー」(rhetoric, rhetorica, rhétorique)について，西洋古代哲学から西洋中世哲学までを視野に入れて，この概念の解明と相互関係は必ずしも明らかではない．実際，西洋哲学史上，哲学の方法として重要な役割を果たしてきた「弁証法」あるいは「問答法」を，その最初期の形態である「ディアレクティケー」にまで立ち返って，その意味と機能をできる限り解明し，現代においても，「対話」「問答」の哲学的な方法としての「問答法」の有効性を明らかにすると同時に，「レートリケー」との関連を解明する作業が基礎研究として求められる．とりわけ，近現代において「弁証法」と訳されることによって，概念の輪郭が曖昧化されてしまっている点を考慮して，西洋古代哲学において，プラトンおよびアリストテレスの「ディアレクティケー」の概念がいかなるものであったかということの解明と，西洋中世哲学において，特に，「ディアレクティケー」の場合は，「ディアレクティカ」の名称の下に，三学四科（トリヴィウム，クワドリヴィウム）に含まれる「論理学」の別名として，用いられたこともあって，その概念規定の曖昧さを生じていると言わざるをえない．従って，もし，この概念がいかなる仕方で受け継がれ，変容を遂げたかを明らかにすることができれば，近現代の「弁証法」の概念において欠落して特徴を浮き彫りにすることが可能になる．

(3)上述のような研究状況を踏まえても，さらに，西洋古代哲学に関しては，「レートリケー」の役割に顧慮しつつ，プラトンとアリストテレスの「ディアレクティケー」概念を中心とした研究，また，西洋中世哲学に関しては，現存する文献の膨大であることと，従って，その内実も多様であることを考慮すれば，ある程度，考察の対象を絞った上で，例えば，13 世紀以前のものとしては，5-6 世紀のボエティウスによるアリストテレスの論理学書のラテン訳および註解，および，アル＝キンディーとアル＝ファーラービーの論理学関係の著作を主な資料とする研究だけでも，その寄与するところは大きいと言わなければ成らない状況である．この場合は，これらに加えて，，13 世紀のトマス・アクィナスと 14 世紀のオッカムの場合と，必要な限りで彼らに関連する他の著作を取り上げた研究は，先述の研究を補完する上で有用である．以上のどれかひとつをとっても，実際には，多数の研究者らの協力が必要な作業であるが，それだけに，もし，これらの基礎的作業がいくつかだけでも行なわれ，それらを比較検討することが可能になるならば，英米語圏の研究においても，また，我が国の研究においても，多くはなされていない，「レートリケー」との関連で，西洋古代哲学および西洋中世哲学という哲学史的視座からの「ディアレクティケー」概念の解明に寄与するところが大きいと期待される状況にある．

２．研究の目的

(1)先述の状況を踏まえて，ディアレクティケーとレートリケーの基礎的な概念そのものについての開明の作業と，実際に，ディアレクティケー的な方法あるいはレートリケーが用いられていると考えられる哲学史上の著作を取り上げて検討する作業のうち，そのいくつかを行なって，それらの比較・考察の対象となり得る素材を準備することを第一段階の目的とする．これは，研究全体の中では，いわば，基礎的作業である．

(2)他方，具体的に，哲学史的な論述の中で，ディアレクティケー的な方法あるいはレートリケーが用いられて，個々の哲学者たちの立場や主張が，批判・検討されている例を，少なくともひとつ示すことを目指す．

(3)以上の基礎的作業によって，具体例との比較・考察を行なうのに，十分な対象が得られた場合には，それらの比較・考察によって，ディアレクティケー的な方法あるいはレートリケーの関係を開明することを目指す．

３．研究の方法

(1)まず，西洋古代哲学史および中世哲学史に関して，ディアレクティケーとレートリケーの基礎的な概念そのものについての開明の作業に関しては，すでに，研究代表者やその他の研究者たちによって行なわれている，研究の成果に基づいて研究を進めると共に，思想あるいは概念規定の，ひとつの観測点あるいは基準として，アリストテレスにおけるディアレクティケーとレートリケーについての研究，とくに Rhétorique chez Aristote（アリストテレスにおけるレートリケー）という課題の下に，アリストテレスのテクストに基づいた文献研究を行なう．

(2)アリストテレスにおけるディアレクティケーとレートリケーについての研究は，同時に，多義的なアリストテレス主義の概念規定の開明に資する研究の仮設的な出発点を与える．これに関しては，すでに，本研究に先

立って，Dialectica et Neoaristotelismus – Whitehead の検討(1)，2008 で示した視点であり，本研究の方法も，その線上で行なわれる．
(3)ディアレクティケー的な方法あるいはレートリケーが用いられている具体例を考察するために，アリストテレス主義の立場からは，対極にあると考えられる後期のホワイトヘッドの著作（特に，『過程と実在』(*Process and Reality*) および『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*)）に取材して，「神」「自然」あるいは「自然の法則」などの主題に関して，ホワイトヘッド自身の主張よりも，むしろ，ホワイトヘッドが，デカルトやロック，ヒューム，さらに，アリストテレスやプラトン，原子論者などに言及して，それぞれの主張・哲学的立場を，どのように説明し，批判・評価しているかを，取り上げて検討する．その際に，「抱握」(prehension)や「切り取り」(cutting-off)，あるいは，「現実的存在」(actual entities)などのホワイトヘッド独自の用語そのものの開明を目的とするのではなく，論述の理解に必要な限りで取り上げる．とは言え，本研究に先立ってすでに，Dialectica et Neoaristotelismus – Whitehead の検討(1)，2008 の中では，これらの用語に一定の紙数を割いて考察を加えているので，それに基づく方法をとる．
(4)同時に，アリストテレス的な「主語-述語」あるいは「基体-属性」という形式による把握の仕方は，ホワイトヘッドが目指す，「主体」(subject)の消去とは，対極にあると考えられるので，特に，主語-述語」あるいは「基体-属性」という形式を象徴的に表現している，アリストテレスの「述語付け」(praedicatio)についての考察を行なって，研究全体を補完する．

４．研究成果
(1)本研究の基礎的作業としての，西洋古代哲学史，中世哲学史に基づいた，ディアレクティケーとレートリケーの基礎的な概念そのものについての開明の作業は，多くを既存の研究に依ったので，実際に，ディアレクティケー的な方法あるいはレートリケーが用いられていると考えられる哲学史上の著作を取り上げて検討する作業のうち，アリストテレスのテクストに基づく研究をいくつかを行なったに留まるが，それらに基づいて，以下の事柄を明らかにし得た．
(2)古代，中世から，近世初頭にまでわたる「自然」観を具体例として，各時代のそれぞれの哲学者たちの思索とその対話のあり方を，ホワイトヘッドの『過程と実在』(*Process and Reality*)および『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*)の立場から，振り返って，検討した．ホワイトヘッドにおいては，彼独自の一種のレトリック，換言すれば，独自の用語法と概念装置に基づきながらではあるが，通常の哲学史的記述とは異なり，時代を超えて，各時代の哲学者の思索との問答・対話（ディアレクティケー）がなされていることが確認できた．ただし，その問答・対話の相手は，古代と近現代に偏るきらいがあることは指摘しておかなくてはならない．
(3)一方，古代・中世におけるディアレクティケー（問答法）とレートリケー（弁論術・修辞学）の関係を明らかにするための作業として，Rhétorique chez Aristote（アリストテレスにおけるレートリケー）に続いて，その論述の最も基礎となる，praedicatio（述語付け）の問題を，同じく，アリストテレスの『カテゴリアイ（範疇論）』を中心に，その他の論理学書（『分析論』『トピカ』）や『形而上学』も視野にいれつつ考察した．アリストテレスにおいては，一方において，問答・対話（ディアレクティケー）を重視する態度をもちながらも，他方においては，形相と質料，基体と属性，あるいは「もの」と「ことば」という捉え方によって，事態を把握し記述することが理由となって，これと異なる捉え方をする哲学者の思索とは相容れないことになる．従来は，この後者が強調されて，前者は，顧みられることは少なかったが，述語付けの捉え方を検討することによって，アリストテレスにおいても，ある程度，ディアレクティケー（問答法）の評価を変えることができる．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

1. Akai Kiyoaki, Praedicatio in *Categoriis* Aristotelis, *The Annals of the Reaserach Project Center for the Comparative Study of Logic*, Vol.8, 査読有，2011, pp.1-6.
2. 赤井清晃，Dialectica et Neoaristotelismus – Whitehead の検討(4)，比較論理学研究，第８号，査読有，2011, pp.7-12.
3.赤井清晃，Dialectica et Neoaristotelismus – Whitehead の検討(3)，比較論理学研究，第７号，査読有，2010, pp.1-5.
4.Akai Kiyoaki, Rhétorique chez Aristote, *The Hiroshima University Studies, Graduate School of Letters*, Vol.69, 査読無，2009, pp.21-27.
5.赤井清晃，Dialectica et Neoaristotelismus – Whitehead の検討(2)，比較論理学研究，第６号，査読有，2009, pp.1-8.

〔学会発表〕（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://home.hiroshima-u.ac.jp/logos/logica/

６．研究組織
(1)研究代表者
赤井　清晃（AKAI KIYOAKI）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：００２９４４９７

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：